

郷土研究資料 (其の1)

美方町の自然環境と古代集落文化集

(1万分1地形図「村岡」参照)

上 治 寅 次 郎

I. は し が き

美方町は兵庫県の西北隅、鳥取県に近い処にあつて、矢田川の上流及び中流の溪谷と山地とをその境域とする。美方町の南半、即ち矢田川の上流、小代川の流域は小代区域で、同町の北半、即ち矢田川の中流の溪谷は射添区域である。

本文に於ては小代区域の自然環境と古代に於ける集落の発達について、地学的考察を試みる。現今、残存する風習、信仰、口碑及古記録などは出来るだけ参考に供し、古代推究の材料としたが、約700年このかた(鎌倉時代)より以前の記録は殆ど見当らない。しかし、延喜5年(1030年前)に出来た延喜式神名帳に小代神社と他多神社とが載っているから、その頃は已に集落のあつたことは確実である。小代には考古学上の調査発見の資料が乏しいので、小代に人類の住み初めた初期の様子は明かに把握出来ない。但し、但馬各地小代の近くでは關宮、兎塚、香住などで古墳時代又はそれ以前の古代遺跡が発見されている故に、小代でも発見される可能性がある。

以上の如き理由で、縄文式時代、弥生式時代の集落文化は地学的推定に止め、祭祀の風習の明白なる民族、即ち、我れ等の祖先の作った集落文化を主として述べる。時代的には古墳時代以後に発祥した集落が主であつて、一部は弥生式時代の末期にも遡るものもあると思う。即ち小代に我等の先祖が集落を作り初めたのは、凡そ1,500年乃至2,000年このかたのことである。

小代は但馬でも辺鄙の地、朝倉高溝、田野入道など落武者の隠れ場となつた位で、中央政治より遠ざかり、史料も知られて居ない。しかし、郷土の研究はどこでも同様で、史料が足りないのが常である。それだけ研究の価値があり、必要があり、妙味も多いのである。

本文は尙検討を要する点が多いが、読者より種々の材料を提供して頂き、正しいものにして行き得れば幸である。本文を纏めるについて文学士藤沢敏郎、西田神職、小代中学片村校長の諸氏から便宜を得たことを感謝する。

I. 環 境

小代は矢田川の上流小代川の溪谷に出来た山村集落である。小代川は南微西から北微東に向つて流下し、長さ7キロ、巾0.2—1.5キロ位の溪谷を形成する。その東西は標高1,000米内外の山地である。小代谷の両斜面には多数の急傾斜の溪谷があつて、大小の谷川の急流によつて浸蝕されつつある。久須部川の谷は最も大きい。何れの谷川も懸壜を作つて小代川に注ぎ、小代川本流は支流に比し、更に谷底浸蝕の盛んなために、河底は岩磐を削り、急湍瀑布、甌穴、深淵を各所に作り、著しく回春しつつある。

小代四周の山地につき地形上特異の点が四つある。(1)瀬川山熔岩原、(2)500米高原、(3)地這り地、(4)湖成段丘これである。詳細は後日に譲る。

1. 瀬川山熔岩原 標高1,000米、南北3キロ、東西1.5キロ、山頂は広い安山岩の熔岩原で、周囲から浸蝕されつつあり、瓶腰岩は火山岩頸で熔岩流出した箇所の一つである。鉢伏山、氷の山、仏の尾、大照山など小代谷の東西に聳える火山は何れも安山岩より成り、次に述べる500米高原上に噴出又は流出したものである。

2. 500米高原 標高400—600米、平均500米の高原は中国地方に広く発達し、中国全部が海底より隆起したことを証する所の海蝕準平原面の一部をなせる特殊の地形であつて、陸地が次第に隆起したことを物語る。この海蝕合地の地形は佐坊合地、新屋合地、天神ヶ平等小代川の上流で、未だ谷頭浸蝕の後れて居る区域に現在まで残存している。小代川の中流以下では平野、実山、野間谷等の山地に僅かに見られるが、溪流による浸蝕の進行により、不明瞭となる。然るに神場合地に至れば明かに保存され、一二峠の高原に連り、地学に興味ある者をして、思はず快哉を叫ばしめる。更に兎和野ヶ原、黒田、高坂一带の合地は実に広大である。其他、美方町内では相岡野、春來野、和佐父野等も同一の地形であるが、射添方面は矢田川本流の浸蝕烈しきために、峡谷を作り、平坦面の残存地形は乏しい。

500米高原は古代民族の集落地として、最もよく利用されたい。高燥で、日受けよく、水害なく、当時低地は陰惨な密林、湿地が多く、居住地として好適

でなかつたと考え得る。殊に狩獵、牧畜を主とする住民の住地としては高原が適当である。

3. 地送り地 500米高地は矢田川の上流小代川と湯舟川とによつて浸蝕されつつあり、表面は緩傾斜地、波状地をなすが、川に面した急崖地には山崩、地送り地を形成する。これは浸蝕輪廻の一行程に外ならぬのである。貫田附近は地形上明らかに地送り地形が保存され、一部は近代迄でも継続して居る。天神ゲ平は残存せる旧時の合地で、天の神を祀つて災害除を祈願したものである。貫田は「ぬけと」の訛と解する。崩れた土地の意。村岡町字宿の地送りは明治40年頃大規模に発生、兎和野ゲ原高原の一端が湯舟川の谷に送り落ちた。其他、温泉町照来の地送りは著名、小なるものでは神場東山地送り、猪谷地送り等枚挙の逞はない。

4. 湖成段丘 大谷の段他の土地より一段高き意、水間あが野あがり野、上野の意、広井野は240—250米の地形的に最も若い段丘で、元忠宮以北、石寺に至る一帯が湖沼であつた当時の堆積物が保存されている。この湖沼は石寺峽隘地を浸蝕して流下、広井、石寺附近に200、180米の低い段丘を残し、最後まで水を湛えていたことを証する。この水溜りを小代旧湖と呼ぶ。

以上の地貌は小代に住民が居住しなかつた以前の自然の状態であるが、溪谷の浸蝕、山崩、地送りなどは現今に至つても尙継続しており、自然は刻々に形状を変化しつつあるのである。古代の自然通路小代に人類が入り込んだ通路は凡そ七通路がある。

1. 矢田川溪谷、2. 一二峠、3. 野間峠、4. 中サバ峠、5. 氷山峠、6. 小長迫峠、7. 枕木越これである。1は近代通路、特に小代人の利用増加は山陰線開通と自動車路完成以後で、古代は利用稀であつたと思う。冬季は和田・村岡經由八鹿方面に至る通路として、一部には利用した。

2と3は古代人に最もよく利用され、最初の小代文化はこの通路より入り込んだと思う。次に6及7の通路は西方より移り来つた出雲系の文化の通路であつて、迎(たわ)峠の意、中国西部にては峠を迎と称する。この名称が今でも残ることは興味が深い。4及5は難路で左程利用されなかつたかもしれぬ。

以上、小代の環境を略記したが、後に述べる聚落の観察から推究すれば、先住民族の文化は不明だが、我々の祖先の築いた文化には、東方系と西方系とがあり、互に融和し、農牧を主とした文化を形成した。祖先が小代に住み初めたのは2,000年も昔のことであろう。而して東方系の文化は西方系に比して早くから発祥して居たらしい。これ等の文化は時代的には、弥生式時代の末から古墳時代の頃発祥して居るものと考え

られる。勿論、東方系西方系共に大陸の影響を受けた同一系統の文化であるが、小代に入り来つた方面から区別したに過ぎぬ。

東方系文化が出雲系文化より早く小代に伝つたことは(1)天神系の小代神社は出雲系の他多神社より創建古きこと、(2)本質的の農牧民は高地の部落民であり小代の旧村は高地にあること、(3)本質的の農民は低地部落に住み新村を作つていること、(4)天津神信仰の小代に出雲神の信仰が浸入した事情が歴史の記録によつても窺はれることなどによつて明かである。

II. 集 落

集落の垂直分布 小代の集落は標高350—500米の間に発祥の古いものが点在し、それ以上の高地は安住し難いので数は乏しく、備(標高750米)はこの地方永住家屋の最高限界である。標高250米以下の低地の集落は現代小代文化の中心をなすが、その発祥は高地集落よりも新しい。藤沢氏の澗川文化の構想は自然環境より見て、合理的であるようだ。小代の最低聚落は石寺で標高180米、一部落としては発祥が最も新しい。

標高(米)	集 落 主 要 部
500—750	小長迫 熱田 青野 中サバ 備
400—500	新屋 佐坊 東垣 鍛冶屋 枕木 神場一部
350—400	神場 秋岡 寺田 久須部
250—350	猪谷 野間谷 実山 平野 茅野 貫田
180—250	石寺 広井 神水 水間 城山 大谷 忠宮

※発祥の古い集落、約1,500年以前と推定

口小代の村々 小代の北部、大体低地、一部高原にある村々で、「小代しも口」という。神場は高原集落の一つであるが、部落の上方に更に高い台地があつて、日当りのよい作り場となつておる。古代の人々はこの高い台地を「上の作り場」「かみば」などと呼んだのが名称の起りであろう。恰も「うえの野」を「うわ野」うえの土地、うわちを和地と言うと同じである。古く1,600年前仁徳天皇の頃、神服連(かんはとりむらじ)という人が、水害なき土地を選んで、この地に住んだのが村名の起源だと石碑に残るが検討の余地がある。しかし古き村であることには疑いはない。当時黒田には黒田大連という人が住んでいたという。何れも但馬国造であると伝う。

信仰は天津神系で氏神を八幡社と呼び、祭典には御

興山車を出し古風である。村に東向観音があつて観世音菩薩を祀り、靈驗高しとして人々の参拝が多かつた。風習は村岡谷入りに似て盆踊、音頭、其他低地の小代と異り、縁組も谷入り方面とよく取り組む。兎和野ヶ原を中心とする板仕野、黒田、高坂、一帯の古代集落の住民が早くから移住し来つたので、この方面とは交渉が多いが、その頃未開拓の小代の低地とは交渉の必要もなかつたが如く、其の風が現代でも多少は残っているものと思う。

石寺の北方には昔石室があつた。明治40年頃は石釜と呼び、筆者幼少の頃の記憶では高6尺、奥行3間間口1間、上方に1坪位2-3個の平石を並べてのせてあつた。南北に長く、南に3×4尺位の入り口があつた。周囲は稜石で囲む。北方は畑の捨石などで高くなつて居た。屋根の平石は厚さ1尺以上もあつた。石は河石の礎ではなくて角張り、加工の跡が残つて居た。岩石は安山岩であつたかと思う。

石寺字石室にも石室があつた由、美方郡誌には高8尺、奥行5間、横2間、入り口3尺とあつて、前者よりも大きい。

入り口3ヶ所を明け悉く平石作り、応永年中(560年前)一僧の建造にかかり、阿弥陀寺といつたが、天文九年山崩にて頽壊した由、口碑に残る。この石室は太古よりあつたものを、寺に利用したものとも解せらる。今は二個共破壊されて不明、石室は太古より天正の頃(約380年前)まで貧民の住居に利用したと伝える。石寺の地名は阿弥陀寺に始まると伝え、元神水の作り場であつたが、享祿年中(約430年前)一村となつたと伝う。附近は低湿にして、久しく一村として発達しなかつたものと思はれる。現在も村の南方には湧泉多量、一部湿地を残す。思うに石寺には石室が2ヶ所あつて共に古墳で盛り土は失はれて石棺のみ露出するに至つたもので、多分射添方面の豪族の墳墓と見らる。石室は川より10米位高いが谷底にあるのは珍らしい。

広井の上には広い合地があつて、古代には住民があつたらしい。その頃低所には水溜りがあつたかもしれない。現今でも「上の家」「泥川」という言葉が残っている。今の広井は石寺と同じく低所にある。猪谷は湯の谷の転訛か今湯口という地名も残る。開拓は広井方面より進み来り「岡の田」(高い所の田の意)と呼び、漸次に興山を開いた形跡がある。猪谷旧道路は広井から通じ、その旧道側の山林中に五輪の石塔が残存する。今前田氏の墓地に移されて居るといふ。口碑に開拓者の墓といふが、其の型式は700年前のものか。一文化財になる。猪谷に徳川末期頃の民謡がある。「尾きん谷から猪谷見れば、可愛およねさんが稗た

く」およねさんは村の娘、稗は当時の常食で、少量の米を混じて喰うのである。昔は「小代の稗ぼろけ」といつて小代の人や村岡の人などから稗を常食とする山男山女扱いにされた。しかし水田乏しく、積雪のため麦作も不十分であつた当時の小代の人々としては、止むを得ぬ措置であつた。又、飢饉に備えて、各戸に稗俵3俵は必ず保存する慣習は往昔小代界隈にあつたと聞く。

水間は「水隈」水のわだかまる意。あが野の段丘を構成する砂礫層中から地下水が滲出するので、古くは湿地が多かつたと思う。しかし石寺の南にも大湿地があつたので古代の小代の道路は広井から水間の山麓を南行したようだ。水間の南に白髪古祠址があつて天津神を祠る。其後文龜年間(約450年前)城山城の見張の士が水間城に住んだ。その1人徳を施した田中重与の霊を祀り、稻荷神を勧請し、稲田中社を建て氏神とした。其後天文年中に出雲系こゝじんの荒神を勧請し合祀して居る。荒神(素戔鳴尊)の崇敬が部落民に深い。

あが野には50年前まで木像薬師仏の堂宇があつたが、木像は水間の公会堂に移されているらしいが旧体とは違つている。元字寺山にあつた宝泉寺(田中氏の氏寺)の薬師堂か否かは不明である。薬師如来は均制のある作品であると記憶する。

神水は大照山の急斜面の麓にあつて、部落の中央部は水害多く、ここに天神社を祀る。天神の祭神は水害除の天の神で菅原道真は合祀されているに過ぎぬが、いつの世にか祭神と間違えられた。部落の北方は湿地で湯の子と呼び鉱泉の湧泉がある。南部は高く水利の便悪しく、嘉永6年(100年前)毛戸氏の努力で高樋より引水し、大井堰を造り灌漑した。氏神白山社は建保年間(約740年前)に村民が勧請し、山の災害を除く祈願をしたと伝える。神水は水禍地で発祥は後れたものと思う。

城山は元大谷、久須部、小長迎、古屋敷等を含めた一村で昔380ヶ年に亘り(村岡は250年間)城があり、村岡の尾白山にも出城があつた。城山の発祥は小長迎、久須部、古屋敷であつて、城が出来てから城山大谷が発達したものであろう。城山の城は建久年間(鎌倉時代、今より760年前)築城の朝倉高平氏残党の城址で、田公清典(670年前)居城、天正5年(380年前)藤堂高虎、及び羽柴秀吉勢に攻められ落城、城址は字段にある。小代城のあつた期間は400年に近く、一二峠道と野間道を守るため水間と茅野に見張城があり、北美文化の中心をなしていた。大谷の氏神は田公氏の勧請で、安明社と呼び、天津神を祀る。念願寺は真宗で本願寺派、天正年間に開山、久須部と大谷との間の田圃中に薬師堂があつて、小代鉱泉繁盛時の創建

というが本尊は失はれ、今は石地藏を安置してある。耳の病に靈験が高い。

野間谷は「のくま谷」曲つた谷の意か、谷の形に符合する。氏神社を三宝荒神と言ひ、天津神と素戔鳴尊を祀る。古く天津神を信仰し、後素戔鳴尊を合祀したのである。牛玉山善福寺は古義真言宗、貞利年間（約610年前）創建、今寺址がある。天正中兵火にかかり、正保2年（310年前）平野に移して再建した。山越しに神場とも関係あり、古村であるようだ。野間谷と野間峠とは語源的に関係があるらしい。

忠宮には式内他多神社貞観3年（約1100年前）の創始、素戔鳴尊を祀る古社がある。出雲系の文化の表徴である。出雲文化は、農業開墾を主とし、小代の低地を開いたことに功績が多い。小代の人々、ことに低地の人々は他多神社を崇拝し、天文年中（約420年前）に一村一社創建と定められたときは石寺、広井、猪谷大谷、野間谷（天津神と合祀）実山、平野、茅野、貫田（後天津神を祀る）東垣、佐坊、新屋後天津神を合祀等は何れも出雲系の社を創建した。神場には古社あり、水間、神水、城山にも己に天津神系の神を迎えてあつたので、出雲系の荒御霊神社素戔鳴尊を氏神としなかつたが、何れも配祀又は合祀して居る。水間の如きは配祀の荒神（こうじん様）の崇敬が却つて祭神に勝つて居る。

小代四近の村々では射添、村岡（低地を除く）兎塚等何れも天津神系の氏神が主なるに反し、小代のみは出雲系の氏神が大多数であることは特筆すべき事実であつて、小代の農業文化と他多神社と深い関係のあることを知ることが出来る。

平野の光明寺は野間谷の善福寺を移転再建したもので、板辻野長福寺の応教法印が中興の祖となつた。代々徳望高き法印が住職となり、徳川時代寺小屋教育に於ては、但馬屈指であつた。氏神は最初は天津神系であつたと思はれるが、今は出雲系である。村の発祥は古るい。弘法大師は川会長楽寺を訪れたらしいが、小代に来たかは明かでない。しかし、鎌倉時代以後小代に創始の寺には真言宗の寺が多く、現在でも村民の95%以上は真言宗光明寺の信徒である。将来も高僧継承し、小代精神文化の重鎮をなすであろう。

奥小代の村々 小代の南部で大体高地にある村々で小代奥寄りという。貫田 茅野附近は谷巾最も狭く、しも口の村々と奥小代の村々との自然の境界をなして居る。貫田は地辺りの遺跡地と見られることは已に述べた。地辺り地を開墾し、他多神社の氏子の部落が出来たが、天文年中（約420年前）八幡社を祀るに至つた。天津神系の八幡社勧誘の事情は個人の崇拝の神を氏神としたと伝えるが、秋岡の小代神社に近く、其の

遠慮と圧力も考え得られ、貫田は秋岡、忠宮の両社の中間にあつて、何れを祀るかに迷つたらしい。

茅野は野間峠の西麓にあつて、峠を越した古代人の一部はこの地に定住し、平野、実山、野間谷等にも移つて行つたようだ。部落内には古社、古祠が多い。又野間峠の要所にあつて、城山の城の見張城があつた。一二峠を越した処に水間城のあつたのと同じく、当時野間峠と一二峠が重要通路なりしを思はしめる。但し地形的に茅野、平野は谷底又は斜面で、古代人に好ましい定住地はなく、彼等には佐坊合地を好適地と考えた様だ。従つて奥小代の佐坊合地に彼等古代人の一大中心文化を形成したのである。

秋岡は式内小代神社、祭神天津神の所在地、社は森巖なる大菩薩山大房山にあり、古代人の崇敬の中心であつた。本社には末社120社、創建不明であるが、他多神社より古く、恐らく、その信仰の発祥は1,500年以前であろう。居望にも天津神系の社がある。竜泉寺は元菩薩山にあり、寛元年中（710年前）創始、古真言宗であつたが、後妙心寺派禅宗の末寺となつた。居望には建暦年中（750年前）の創始と伝える安養寺址元禅宗、後真言宗に改宗がある。居望の奥、1里余の溪谷は桑仙峽と呼び、原始林の山溪美に於て稀に見る幽邃境である。兵庫県坂本知事は森林地として但馬木曾と呼んだ。

佐坊、鍛冶屋、東垣の合地は日当たりもよく、古くより牧農を主とする住民の定住した部落だと推定される。野間峠又は中サバ越を越えて来た民族は、最初にこの合地を定住地に適すると考えたであろう。佐坊、東垣は出雲系の信仰を有するが、元来小代神社の勢力圏であつて、佐坊の上田氏は約340年前、天津神に復帰を企てたが、果さず、信仰せる太神宮を小代神社に遷座して祀つた伝える。この地が出雲系となつたのは450年前（永正年間）城山の田公氏の一族が毛利元就公に仕え、毛利公は出雲大社を崇敬せる関係上、他多神社の神職山本氏に命じて佐坊、東垣、鍛冶屋を支配せしめたのに始る。しかし小長辺方面から伝わつた出雲文化の一派が山越し佐坊合地に侵入していたのかとも思う。鍛冶屋には延喜式の前から小代神社の撰社吉滝社（弘仁年間1,150年前）創始が巖として創建され居るを以て、出雲系とならず、特に権現をも勧誘し、神仏混淆となつて居たので、中立を維持したのであろう。

東垣の大日堂は創建不明であるが、牧畜の神を崇める古代人の思想が、奈良時代又は其後に表現したものと考える。神仏混淆説では大日は太陽、其の権化は大日菩薩と共に同一であると説く。天津神を祀る意味には変りはない。大日堂は文化7年光明寺竜宝法印と庄

屋今井氏との力で修理された。奥小代に牛を祭る大日堂のあることは土地の好適、住民に牧牛を好む気風の根強いことを知るに足る資料となり、現今でも藁牛などの名牛が奥小代で産すること、伝統的に深い関係があると思う。

佐坊台地の一部を開拓するため、吉滝方面よりトンネルを以て灌漑用水を引水して居ると田村町長から聞く、多分徳川時代の土木工事と思はれるが、神水の高樋堰工事、神場の峠の大溜池工事年代不明と共に小代水田開発三大工事である。500米高原は灌漑を考按すれば尙開拓の余地を残す。1,000米の瀨川山熔岩台も酪農地として利用されよう。熔岩台と第三紀層との間の地下水は大量の見込で利用し得る筈である。これ等は今後美方町開拓のテーマとして重要な問題である。

新屋は佐坊台地に後れて発祥した。多分出雲系の人々が登つて開拓したらしく、氏神には素戔鳴尊を祀つた。熱田は建久の頃(約750年前)に信濃源氏の一族

と出雲神とを合祀し、三宝荒神としたのが、現今の新屋の氏神であるという。

新屋の台地は広く、大部落で、中サバ、備などの小集落も分離して附近の台地を開拓して居る。新屋台地が北向きで寒風を受け易いことは、佐坊台地が東南を受け、北及西北を塞ぎ、日受けよく、暖いものと異なる。古代の人達が佐坊台地に早く定住したのも当然である。黒田、和地、高坂の集落が瀨川山の東南麓の台地に太古から発達したのと同一である。地理的見解では先住民族も佐坊台地に住んで居たとも考え得る。

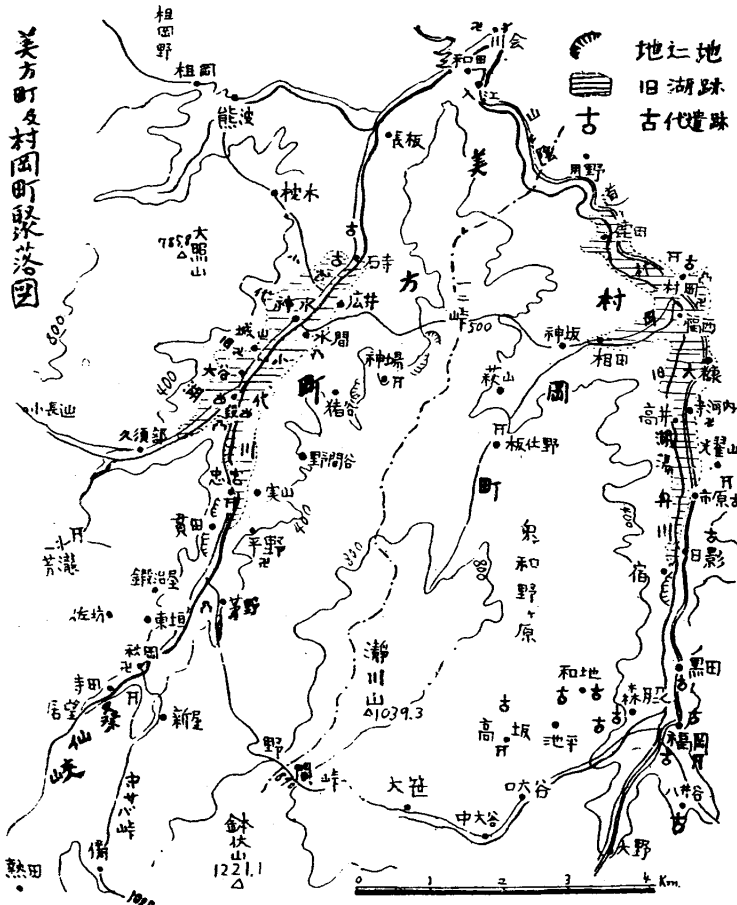
IV. 結 言

小代の自然環境と記録、口碑、風習、信仰などから推究すれば、二系統の文化が互に融合して、初期の小代集落と文化とを作つて居る。それ以前の先住民族の文化については資料が未だ不十分である。

1. 先人系文化 小代にもあると思うが、今は不明である。神場台地、佐坊台地、又は段、あが野、広井

段丘などは、これ等の遺跡、遺物を探るに適當の土地であると思う。雨上りの日などには畑土中に矢の根石、古土器などが洗い出されて露出して居ることがあるかもしれぬ。土工、開墾などの際にも発掘される可能性がある。但し土器には縄紋式、弥生式、古墳式など新旧の種類があるから型式の研究を要する。

2. 天津神系文化 大和文化とせば、少しく時代上の範囲が狭くなる。藤沢文学士の瀨川文化が適當な表現かも知れぬ。しかしこの文化はどの方面から来たかは別として、小代の近くでは瀨川山東麓、標高500米内外の兎和野一帯の台地に発達し、一二峠を越して神場台地に、野間峠を経て佐坊台地に移り来つて集落を作つたようだ。兎和野系文化といつてもよい。牧畜を



田野入道の隔暹したのが部落の始りで、其後水害のため天文9年(415年前)に現今の新屋に移つた。熱田では熱田神宮を祀つて居り、之を新屋に移し、天津神

主とし、農耕も営んだ。太陽、天津神を信仰した。佐坊、東垣、鍛冶屋、秋岡、居望、神場は最初の集落で野間谷、平野などは稍後れて出来たようだ。茅野は

野間峠への交通集落として発祥したものと思う。奥小代にこの文化の中心があつて、推定約1,500年前、已に天津神を祀り、小代神社の初めをなすに至つた。當時は野間峠は最も重要な通路であつた。一二峠が重要通路となつたのはずっと後のことである。神場神社もその頃のものが、規模は小さい。

この文化は城山、広井、水間に迄及んだかもしれぬが、多くは標高250米以下には下らなかつたらしい。低地は密林、低湿、水害などの外、日受けも悪く、牧畜に不便であつた為めだと思はれる。

3. 出雲系文化 主として西方からの文化で、出雲鳥取などの低地で農耕を主とした文化である。小長迎峠又は枕木越射添方面からも入り来つたものと思う。標高250米以下の低地を開拓し、素戔鳴尊を祀り約1,000年前に他多神社を創建したらしい。水間、神水、大谷、忠宮等低地の集落はこの頃発祥した。この文化は天津神系文化に遅れて小代に入り込んだようだ。

出雲文化は貫田、佐坊、新屋、其他高地にも波及し高地より低地に及ぶ天津神文化と融和し、農牧を主とする小代文化の初期を形成した。初期の小代文化は時代的には弥生式時代の末期、主として古墳時代に発祥し、歴史時代へ移つて行つたと考える。

4. 中央政治の支配 今より1,500年乃至2,000年前小代の古代人が、農牧に平和な生活を送つて居た頃、日本には重大事件が起りつつあつた。それは大和朝廷の中央集権が行はれつつあつたことである。

暫く経過した後には国造(くにのみつこ)(今の知事の如き役人)、大連(おおむらじ)連(むらじ)などの役人が出来て、地方の政治と神祭りとを司るようになって、小代の古代の人々もその支配を受けねばならないようになった。黒田大連、神服連かんはごりなどの名は、現今でも口碑に残る。

歴史時代になつてから、奈良時代、平安時代の小代

史料は乏しいが、鎌倉時代以後の史料は断片的に散見する。城山城主田公氏等400年間の支配は住民とよく融和し、水間、茅野及今の村岡に出城を設け、七美文化の中心となつたのである。勤儉の美風、健実なる思想、安定せる生活も城主の感化に俟つ処が多かつたと思はれる。城山城は羽柴秀吉の勢力とその奇智に逢つて廃城となつたが、小代住民が挙つて田公氏のために犠牲を捧げたのも其の徳の一端を窺うに足ると思う。

徳川初期に山名氏が村岡に移封、築城、村岡は城下街として発達した。小代の住民は田公氏と変る山名氏家臣の非政を糾弾し、小代一揆などと罵られつつも急先鋒となつて闘争した記録がある。今や町制を施行し、古き小代村は新しき美方町に装を更え、経済に、文化に、一大躍進を遂げつつあつて、北但に於ける一理想郷を出現する日も遠くはないと思はれる。

補遺 小代は従来、交通不便な山間にあつたから、中央の教化に後れ、且つ古代の風習、言語などが屢々残つて居る。明治30年頃(今より60年前)には石と鉄とを磨り合せて発火させて煙草の火などをつくる人があつた。又黒い石の板をみがき、軟い石の棒で白い字を書いた。之を石板、石筆と呼び、大切な学用具であつた。消しては又書く、節約的で、練習には便利であるが、時々破損するので困つた。石器を使用した時代の遺風かも知れない。60年前には茅葺きの家が殆んど全部で、出雲、石見、安芸などの人が屋根葺き工人としてよく来た。これ等も出雲文化の伝播の古い伝統を物語るようである。

かような風習、口碑などはいつとなく忘れられる。古器物其他の史料も散逸して失はれて行くものである。「美方考古館」又は「民芸館」といつたものを作ることは文化研究、文化財保護、観光資材集集に役立つことが多いと確信する。

著者本県出身、兵庫県生物学会顧問、現財団法人地下資源研究所理事長、工学博士(京都・左京・北白川堂ノ前町18)

森 会長の御寄付

この度、10周年記念号、出版につき資金の都合がつかず相談しましたところ、会長より金壹万円の寄付を戴き、会員諸氏に会誌を分けることが出来ました。一同に代りまして厚く御礼を申し上げます。

なお、会長は停年のため、農大を辞し名与教授として御指導される一方、武庫川女子大学教授を兼任されることとなりました。新住宅は、神戸市灘区本山町岡本梅林住宅56です。